

ジェンダー平等推進に向けて③

ジェンダー平等推進委員会委員 宇治 和貴

6月12日に世界経済フォーラム(WEF)が発表した2025年の「グローバルジェンダーギャップレポート」において、日本のジェンダーギャップ指数は148カ国中118位、先進国では最下位という結果でした。ジェンダーギャップ指数とはジェンダー平等達成指数のこと、各国の「経済」「教育」「健康」「政治」

環境があるため、女性が働きづらい状況が恒常化していると考えられています。一方、ジェンダーギャップが少ない国では、ジェンダーの多様性のみならず、さまざまな立場の人が政治や企業意思決定機関に参加することで、その国の人権状況が改善し、経済や社会が発展しています。また、ジェンダーギャッ

自分の当たり前を問い直す

分野における男女格差を数値化したものです。

特に日本は「政治」と「経済」の分野で格差が大きいことが指摘されています。

これは政治や企業などの意思決定機関に女性が少ないという、日本社会の課題が数値として示されているのです。政治家に女性が少ないということは、男性中心の価値観で政策が決定されがちだということを示しています。また、企業でも女性の意見が採用されづらい

プは、性別に基づいて社会的・文化的に望ましいとみなされる役割を期待される性役割(ジェンダーロール)とも深く関係しています。「男性が外で働き、女性は家事や子育てをする」といった性別に基づく役割の固定観念が強いことが、社会において女性が男性同様に活躍する妨げになっているからです。

かつて、育児に参加する男性を、肯定的に「イクメン」と表現していました。

しかし、育児に関わる女性を表す対義語はありません。子育ては女性がするものだという前提が社会に内在しているからです。肯定的な意味で使われている言葉でも、無意識のうちに性役割が前提とされていることが確認されます。

親鸞聖人は『御消息』に、阿弥陀仏の本願を聞き念仏するようになった人には、「世をいとふしるし」が表れてくると示されています(註釈版聖典74頁)。阿弥陀仏の教えに導かれることで、これまで自己中心だった自らを深く省みて、同朋を大切にしようとする念仏者の姿をご教示いただいたお言葉だと受けとめられます。

宗門でジェンダー平等を推進するということは、私たち自身が当たり前だと思いついていない価値観を問い直し、性差に苦しんでいる同朋を大切にしようとする取り組みでもあります。すべての人が社会で決められた性役割にとらわれることなく、一人ひとりが自らの望む形で参画し、自他ともに心豊かに生きることのできる御同朋の社会をめざして、ともに歩みをすすめてまいりましょう。

(次回は11月1日号の予定)